

研究機関名：東北大学

受付番号： 2013-1-523
研究課題名 I型胆道閉鎖症において肝管形態が長期的な予後に与える影響に関する研究
研究期間 西暦 2014年2月（倫理委員会承認後）～ 2014年12月
対象材料 <input type="checkbox"/> 病理材料（対象臓器名） <input type="checkbox"/> 生検材料（対象臓器名） <input type="checkbox"/> 血液材料 <input type="checkbox"/> 遊離細胞 <input checked="" type="checkbox"/> その他（ 診療録、手術所見、術中胆道造影 ）
上記材料の採取期間 西暦 1971年 1月～ 2013年 12月
意義、目的 胆道閉鎖症（以下本症）の定義は新生児期から乳児期早期に肝外胆管に完全閉塞部位を認める病態である。その閉塞部位により総胆管閉塞型（I型）、肝管閉塞型（II型）および肝門部閉塞型（III型）と3つの基本型に分類されている。I型には閉塞部位より上部に嚢腫様構造物が存在する場合があり、これをIcyst型としている。 また本症では閉塞部位を含めた肝外胆管を切除して胆道再建を行うが、切除した肝側に吻合が可能な胆管が存在するものを以前より吻合可能型と称している。また肝外胆管に嚢胞が形成されている本症は、他の病型に比べて予後が良好な例が多いことが知られている。 このような背景の中、吻合可能型で且つIcyst型の胆道閉鎖症は、同じく比較的良好な予後が期待され、また形態的に類似点の多い先天性胆道拡張症との鑑別が議論されている。 今回は本症のI型を対象を限定して、肝管形態と予後との関連を調べることで、胆道閉鎖症として扱われている症例でとくに肝管径の太いものが先天性胆道拡張症の性格を有するかどうかを検討する。
方法 1971年から2013年までに当科で治療した胆道閉鎖症のうち嚢胞を伴わない総胆管閉塞型（I型）が10例で、嚢胞を伴うIcyst型が30例であった。 手術所見ならびに術中胆道造影より胆道の形態に関する情報を抽出し、40例を肝管形態により、1mm以上の内腔を有する α 型18例と1mm未満の β 型22例の2群に分ける。対象症例の診療録から術後の臨床経過として、胆道閉鎖症手術による黄疸消失ならびに術後黄疸再発の有無、肝機能障害の程度、肝移植の有無、胆管炎の有無と頻度、門脈圧亢進症の有無及び程度と同病態に対する外科的治療の有無について情報を抽出して検討する。
問い合わせ・苦情等の窓口 宮城県仙台市青葉区星陵町1-1 東北大学大学院小児外科学分野 022-717-7237 責任者名：仁尾正記